結成20周年
新たな大躍進に向け出発！

動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号（動力車会館）
電話（鉄電）千葉 2935・2939番
（公）043（222）7207番
2000.8.1 No.5174

国労臨大と国鉄闘争の展望

◉中野 洋（7・15動労千葉を支援する会での報告より）上

今号より二号にわたって、七月一五日に開催された、動労千葉を支援する会での、本部・中野委員長の、「国労臨大の闘いと国鉄闘争の展望」をテーマにした講演の要旨を掲載していきます。

「二〇〇〇年七月一日」に何が起こったのか！

国鉄闘争が今、大変な正念場を迎えている。七月一日に国鉄労働組合が臨時大会を開き、それをめぐって今の日本の労働運動の現状を最先端で象徴するような出来事が起こった。これをどう見たらいいのか、これからどう考えたらいいのか、さらに国鉄闘争が日本の労働者全体にとってどういう位置にあるのかを確認したい。

「二〇〇〇年七月一日に何が起こったのか」などと、一労働組合の臨時大会をめぐって起こったことを言うのかというと、やはりそれは国鉄労働組合だからです。起こったことは、ある意味では二〇〇〇年という年の帰趨を決するぐらいの大きな意味を持っている。特にこの七月一日の臨時大会で、敵の目論見をいったん粉砕して、大変な勝利の地平を切り拓いたと、大胆に総括すべきではないかと思います。

これで国鉄労働組合という日本の戦後労働運動の老舗の労働組合が首の皮一枚でつながったということだけでなく、闘う労働運動の再生への大きな突破口をつくりあげた。支配者階級たちの目論見を大きく粉砕していく展望をこじあけた。それくらいデカイ意味がある。

誰にも責任がなくて、一体誰に対して解雇撤回を要求するのか

七月一日に起こったことは、五月三〇日、自民党・公明党・保守党の与党三党と社民党が、ＪＲ不採用問題、つまり一〇四七名問題の「解決案」と称する「打開案」をまとめて提示したことが直接の起因になっています。

「四党合意」の核心は、「ＪＲに法的責任はないことを認める」ということです。「ＪＲに法的責任がない」ことを認めると首切りの責任の所在がなくなります。国労は一九九九年三月一八日に臨時大会を開いて、「国鉄改革法承認」を決めていますから、すでに「政府に責任がない」ことを認めている。

今回、「ＪＲにも責任がない」ことを認めてしまえば、現に一〇四七名の解雇撤回を闘っている人たちは、誰に対して解雇撤回を要求するのかということにもなるわけです。こうした方針を臨時全国大会で提案することは、国労の在り方を根本的に転換させることになるわけですから、当然、国労内外で大変な動きがあることは当たり前のことです。

「四党合意」をめぐる攻防、これは明らかに、国労の変質や国労自体の解体を狙う攻撃であり、それはイコール、日本の階級的労働運動をどういうふうに防衛していくのかという運動であった。つまり資本に対して闘おうというものを日本労働運動から完全に解体し奪ってしまおうという攻撃、これが国労の臨大をめぐって激突した。国労という一労働組合をめぐる攻防ではあるけれども、日本の労働運動に計りしれない影響を与えざるをえない、そういう位置を持っていた。

今、連合支配下で日本の労働者は苦吟しています。権利を奪われ、好き勝手に首を切られているにもかかわらず、何一つこれに対抗できない。そういう労働者がバラバラではなくて、ひとつの大きな幹に結集したときに巨大な力を発揮する。国鉄闘争、とりわけ国労の存在はそういう可能性をもっています。その意味で、「二〇〇〇年七月一日に何が起こったのか」ということなのです。

全体の総和の闘いの蓄積！「演壇占拠」は歴史的壮挙！

構造をみると、敵の側には、国家権力、自公保に社民党が組みし、ＪＲ資本も全部そこにつき、ＪＲ連合は国労にこれをのんで来いといい、ＪＲ総連革マルも同じようにスタンスは違うが向こう側で国労解体を狙っている。

その意を受けて手先になっているのが国労本部のチャレンジグループと言われている連中、この連中が国労の各級機関をけっこう牛耳っている。もうひとつ許しがたいことに、日本共産党・革同の中の多数派、国労副委員長の上村を中心としたグループが手先の役割を果たしている。

これに対して国労の中では、闘争団を先頭に、この両派に猛然と反発する勢力が存在している。この勢力は組合機関的には少数派です。しかし国労全体からみると多数派です。なぜならばＪＲ本体に残った国労組合員は、私たちと同じようにさんざん差別・選別されて今日まで国労の旗を守って闘っ

てきている。こんなことに組するはずがない。ですから大衆的には完全に多数派だと思っています。

臨時大会「休会」＝「四党合意」を葬り去った意義！

七・一臨大は、結果としては闘争団の諸君たちを先頭に最後は、「演壇占拠」を敢行した。そこまで行ったのは、「四党合意」が出てからのいろんな要素が「演壇占拠」という形で結実したということです。

一応、形式的には「休会」ということになりました。「休会」ですから続会大会をいつでも開けるという関係になっています。しかし、ここを打ち返したということは大変な歴史的壮挙です。

この闘いによって、分割・民営化反対闘争の地平は断固として守りぬかれた。戦後五十年あまりを経て、総評が解散して連合ができて、その中からもう一つ新しい労働運動をつくっていかなければならないという新しい動きが起こっていますが、そういう歴史的な流れでみたときにこの闘いは極めて重大な出来事だったと言えるのではないかと思います。

現象的に臨大は「休会」、「四党合意」を葬り去った意義を、国労組合員だけじゃなく、日本の労働者は拍手喝采しなければならないと思いますし、実際にそうなっていると思います。このことによって決定的にダメージを受け消耗したのは誰かをしっかりと見るべきです。闘いを押しつぶそうとした敵が一番消耗するのは当たり前です。

一番元気になっているのは闘争団でしょう。ビックリしているという要素もあるかもしれない。やったことの階級性だとか歴史性だとかは大変なものです。「演壇占拠」は、これほど正義の闘いはない。これは緒戦を切り開いたにすぎないないわけであって、これからいろんな大変なことが起こってくる。ですからこの緒戦の勝利を確信し、続会大会をやるとするならば、七・一を五倍、一〇倍する傍聴で埋め尽くす。そういうことを獲得するためにどうしたらいいのかということが当面する大きな課題だと思います。

「四党合意」受け入れは国労に分裂・亡裂をもちこむものだ！

国労サイドの議論でおかしいと思うのは、「四党合意」を「解決案だ」と考えているということです。一応建前は、「ＪＲ不採用問題の打開について」という形をとっていますが、「解決案」でもなんでもない。闘争団を解体する。国労を変質・解体する敵の攻撃なんだということをはっきりさせることが大事だと思います。

この「四党合意」を受けるということは、首切りを承認するということになる。七月一日の臨大に現われたことは、首切りを認める側と首切りは絶対に認められない側との闘いだった。だから、これは非常に非和解的です。労働組合が首切るという側に立ったら、これは労働組合ではなくなります。これは思想信条の違いを超えている問題です。

ですから、この方針をあえてとって、全国大会を招集するということは、国鉄労働組合は分裂してもいい、割れてもいいんだ、大変な亡裂が生まれてもいいんだということを前提としないかぎり大会は開けない。

すべての闘いは団結を強化するためにやる。団結が壊れてもいいと考えてやるのであったらそれは労働組合ではないと言わなければなりません。

しかも、七月一日の臨大は、国鉄労働組合が自主的主体的に招集した大会じゃない。本来ならこの一点で蹴る問題です。われわれの方針はわれわれで決めるというのが労働組合ではないですか。政府に言われて決める。これは完全に腐敗・堕落です。自ら労働組合じゃないことを認めたということです。

一切の責任は国労本部にある！

「演壇占拠」を「暴力行為」とする反暴力キャンペーンは、国労の中だけで外にはあまり出ていない。

七月一日の臨大強行こそ巨大な暴力です。一〇四七名問題の解決のためだと称していながら、一〇四七名の八割も九割も反対しているのを敢えて強行するなんて暴力以外の何ものでもない。いずれにしてもあの時に反対した闘争団を先頭とした国労の諸君たちは、国労の伝統を紙一重、首の皮一枚のところで守った。この点、久方ぶりに国労はやっぱり鯛だというのを見せてもらった。

誤れば原則に戻り出直すことだ

展望をはっきりさせて闘わなければならない。

「四党合意」を粉砕すれば「解決水準」は上がります。「四党合意」の粉砕は解決水準をあげるのです。なぜこんなことを言うかというと、今の国労のやり方は、労働組合の在り方を逸脱しているからです。

迷ったら、まちがったら原則に戻れということは、簡単なようで大変なことです。間違っていると気が付いたら、元に戻すべきなんです。具体的には続会大会をやらないことです。

一番いいことは「四党合意」を蹴ればいい。でもそれはできないでしょう。だから、最低、「四党合意」をめぐって大会代議員選挙をやって、定期大会で真を問うべきです。

敵の弱点を見極めて闘おう！

それから、敵の弱点を見極めるということです。

今、困っているのはどっちなのか。われわれや国労はそんなに困っていない。もうとっくに困ったことは終わっている。

職場での差別・選別など、もうこれ以上やることがない。敵は手を出し尽くし、われわれも基本的に踏張ってきたからこれ以上何も恐いものはない。

今年の臨時国会で出されるという、「完全民営化法」一つとってもそうです。これは東日本があと五十万株を市場に放出して売れば完全民営化だと言う人もいますが、これはウソです。一〇四七名闘争という国鉄分割・民営化反対闘争自体が残っていたら、「完全民営化」は成り立たない。なぜならば国鉄分割・民営化攻撃とは、国鉄労働運動をこの世の中から一掃するという攻撃です。それが残っている。その象徴的な一〇四七名闘争を残しておいて完全民営化が成り立つはずがない。

敵は困っている。だから国労幹部の屈伏ぶりを見透かし、一挙に「四党合意」まで来たんです。

ＪＲだって貨物はどうにもならないほどの赤字です。三島もそうです。何よりも列車がまともに動かなくて事故ばかり起こっている。労使関係だって「一企業一組合」なんて偉そうなことを言っても、今や、ＪＲ総連も東から叩き出されようとしてきている。向こう十何年間の矛盾が全部集中して現われている。われわれや国労のサイドに何か矛盾がありますか。弱みは向こうにいっぱいあるんです。

（次号へつづく）